

番組

景

武田友志
松木千俊
大槻文藏
殿田謙吉

能

龜井忠雄
幸正昭

藤田貴寛

赤松禎友
觀世清和
武田尚浩

佐川勝貴
武田宗典
武田文志
清水義也

今井泰介
武田宗和
武田志房
浅見重好

狂言

山本則俊

山本泰太郎
若松隆

山本則秀
山本則孝
山本則重
山本修三郎

14:20頃

福の神

休憩 三十分

仕舞

花 籠
融 狂
今井泰介

浅見重好
岡久広
武田宗和
武田尚浩

15:10頃

舞囃子

羽衣 替ノ型
本田光洋

龜井洋佑
飯富孔明

小寺佐七
杉信太朗
佐藤俊之
櫻間金記
辻井八郎

能

安福光雄
大倉源次郎

藤田次郎

15:40頃

三井寺

清水義久
浅見真州
宝生欣哉
大日方寛
御厨誠吾
山本則秀
山本則重

武田祥照
武田宗典
武田文志
松木千俊

小川博久
岡久広
武田志房
武田友志

佐川勝貴
觀世恭秀
武田邦弘

附祝言

終了予定

十七時二十分

能 景清 舞台展開「かげきよ」

1、人丸と従者の登場
常の通り囃子方、地謡が着座すると、引廻しの掛けられた藁屋の作り物が出される。平家方の武将・悪七兵衛景清(あくしちびょうえかげきよ)の娘である人丸(ツシ)とその従者(トモ)が登場し、人丸は長年鎌倉に住んでいたが、父が日向国(ひゅうがのくに、現在の宮崎県)で生き延びていると風の便りに聞いたので、父を探すために旅に出たことを語る。日向国に着いた一行は、周辺で景清の行方を尋ねることにする。

2、景清の登場

藁屋の中にいる景清(シテ)が、あばら家に一人で暮らし、盲目故に暗闇の中にいる孤独と衰えた身の上を独白する。人丸はあばら家に乞食がいるのを見つけ、従者に景清の行方を尋ねさせる。景清は娘と気付きつつも知らぬふりをして、二人をやり過ごす。
3、里人が景清の在り処を教える
二人は景清の行方を問うために里人(ワキ)を呼び出す。里人は先ほどの乞食こそ景清であると教え、あまりにも変わり果てた身を恥じて名乗らなかつたのだと推察し、ともにあばら家へと向かう。

4、里人は景清を呼び出す

あばら家に着いた里人は柱を叩いて景清を呼び出す。景清はその名は捨てた名であると思態をつぐが、悪七兵衛の名と共に悪心も捨てたと行って非礼を詫げる。里人は自分よりも前に景清を尋ねた人がいないかと聞くと、景清は知らないふりをする。

5、親子の対面

里人は景清と人丸を対面させる。人丸は、景清が自分と会おうとしなかつたことを嘆く。景清は、人丸が自分の子供だと知られてしまったのは、人丸に迷惑がかかると考えてあえて名乗らなかつたと答える。

6、戦語りをする

里人は景清に、景清の武功で有名な屋島の戦いの「鍛引き(しころびき)」の語りをするように勧める。景清はこれを語り終えたら故郷に帰るようにと人丸に言い聞かせ、語りはじめる。

時は元暦元年三月下旬の事、平家軍は船に乗り、源氏は陸で相対していた。平教経の命を受けて源義経を討ち取るために陸に攻め込むと、源氏軍は散り散りになってしまった。景清は源氏軍の三保谷(みおのや)の兜を掴んで後ろへ引き、互いに引き合いになったが、兜の鍛が切れて互いに離れた。遥かに離れて互いに力の強さと首の骨の強さを称えあつた。

7、別れ

語り終えた景清は人丸に自分の菩提を弔ってもらうように頼み、人丸は故郷へと帰る。

狂言 福の神 あらすじ「ふくのかみ」

大晦日の夜は必ず「福の神」の神前で年越しをする信心深い二人の男、今年も揃って詣で、豊かになつていくことを喜びながら豆を蒔いていると、突然不思議な気が漂い、福の神が現れます。福の神は二人の心がけを褒め、好物の酒をねだつて上機嫌になると、さらに豊かになるための心得を伝授します。

舞囃子 羽衣 替ノ型 あらすじ「はごろもかえのかた」

駿河国三保の松原に住む漁師・白龍(ワキ)が春のどかな浦の様子を眺めていると、松に美しい衣が掛かっているのを見つけ、持ち帰ろうとする。すると天女(シテ)が現れ、それは天女の羽衣であるので返してほしいと呼び掛ける。白龍は衣を返すことにするが、代わりに天上界に伝わる舞楽を見せてほしいと頼む。羽衣を着た天女は月の宮殿に伝わる美しい舞を見せ、そのうちに天高く飛翔し、消えていく。
※「舞囃子」は能の一部分を紋付き袴姿で上演する形式です。今回は、天女が衣を着て舞を舞う部分から終曲までを上演します。

能 三井寺 舞台展開「みいでら」

1、千満の母の登場
常の通り囃子方、地謡が着座すると、千満(せんみつ)の母(前シテ)が登場して舞台正面に下居する。所は都・清水寺。行方知れずとなつた自分の子供と再会できるように観音菩薩に祈ると、ある夢のお告げを得る。この夢の意味を所の者(アイ)に占ってもらおうと、三井寺に行けば子供に会えると教えられる。これを聞き、母は三井寺へと向かう(中入り)。
2、三井寺の僧一行と稚児の登場
舞台上に鐘楼の作り物が出される。三井寺の僧一行(ワキ・ワキツレ)が登場し、本日は八月十五日の名月なので、縁あって保護している稚児(子方)を伴つて境内の庭で月見をする旨を語る。そして能力(アイ)を呼び出し、舞を舞わせ、月を眺める。

3、狂女となつた千満の母の登場
子を想うあまり物狂いとなつた母(後シテ)が登場し、都から琵琶湖のほとりにある三井寺までの道筋や、三井寺から見える湖の景色や月の様子を語る。
4、物狂いとなつた母が鐘を撞く
能力が後夜(午前二時)の鐘を撞くと、この音を聞いた母が境内の庭に現れて鐘を撞こうとする。僧が止めると、母は中国の故事を引き、風情のある人でも月光の下では心が乱れるものであると答え、鐘を撞く。

5、鐘についての様々な逸話を語る
鐘は多くの和歌に詠まれており、春を惜しむ和歌、夫婦の朝の別れを惜しむ和歌、昔を偲ぶ和歌などがある。波の静まりかえつた琵琶湖に秋の月が冴えわたり、三井寺の鐘が響く。
6、母子の再会
狂女を見た稚児が母と気付き、僧に狂女の故郷を尋ねるように頼む。僧の問いかけに母は清見関(きよみがせき)の者であると答え、僧の隣にいる稚児が自分の息子であると気づく。近寄ろうとすると僧に打ちすえられる。稚児は声を上げ、自分も同郷の者で、人買いにさらわれてこの寺にやってきたと明かす。そして、親子は再会を果たし、共に故郷に帰って行った。

能 景清

■景清——源氏への復讐に執念を燃やす落人の代表

本曲はその名の通り、悪七兵衛景清(あくしちびょうえかげきよ)がシテの曲になっています。この曲が生まれた中世においては、景清は様々な芸能に取り上げられるほど有名な存在でしたが、現代を生きる我々にとってはあまり馴染みのない人物と言えます。そのため、まず景清について説明する必要があります。景清は架空の存在であると主張する歴史家もいるほど不確かな伝承や伝説が多く、確かな史実の乏しい人物ですが、父は平家方の武将で、藤原秀郷の子孫・上総介(かずさのすけ)藤原忠清と言われています。景清は、『平家物語』では源頼政との宇治川の合戦にて侍大将として初めて登場します。それ以後も、木曾義仲との北陸での合戦、源行家との室山合戦、一ノ谷の合戦、藤戸合戦などに参戦していますが、特段の武功を立てた記述はありません。そして、屋島の戦いの「綴引(き)の記述がありますが(舞台展開5を参照)、その後の壇ノ浦の戦いでも特段の記述はなく、戦後に落ち延びた侍の一人として記されています。平家滅亡後は、平重盛の息子・平忠房が紀伊国で反乱を起こすとこれに参加し、鎌倉幕府軍によって鎮圧されると、京都・法性寺(ほつしょうじ)での平知忠(平知盛の息子)の挙兵に参じています。景清はどちらの戦でも負けながら、追手からは逃げ延びていることから「逃げ上手」「生き上手」と評されています。その後、鎌倉で捕らえられ法師となつて常陸国に下り、断食の末に建久六年(一一九五)の東大寺大仏開眼供養の日に亡くなったとされています。

以上が『平家物語』に書かれている景清についてのあらましですが、源平合戦での活躍よりも、平家滅亡後の奮闘が多く見受けられます。これによって景清は平家滅亡後も源氏への復讐に執念を燃やす落人(おちうど)の代表として造形されるようになり、別の落人の活躍も彼にまつわる物語に組み込まれ、様々な伝説が生まれました。例えば能「大仏供養」では、東大

絶つて二度と源氏の世を見ないために両目を潰して日向国に下つたと言われています。

ちなみに悪七兵衛の「悪」とは、叔父の大日坊を殺したために付けられた仇名とされていますが、現在の「善悪」の意味ではなく、中世においては「猛々しく力強いこと」を指していました。

■注目は景清の人物描写、シテの謡い出し、親子の情愛

「景清」をご覧いただくにあたりいくつか要点を挙げておきますと、一つ目はシテの思う景清像です。先述のように景清には様々な伝承がありますが、能「景清」では彼が失明した理由は述べられていません。そのため、乞食に身を落とすにさすらい、その結果、失明したのかもしれない。つまり、老いさらばえた景清や、まだまだ武士としての気概を残す景清など、様々な景清像が考えられます。シテの衣装も着流しと大口(袴のようなもの)の二通りの選択肢があり、能面も「景清」という本曲でのみ使用する専用面を使いますが、これも髭を蓄えたものと髭がないものがあります。どちらも当日勤められるシテが自分の思う景清像に合わせて選択しますので、シテの衣装や一挙手一投足を見ていただき、シテがどのような景清像を思っているのかを想像していただけだと思います。

また、二つ目の見どころとしては、古い伝書に「松門の出いかにもすねすねしく、いたつて根づよく謡ふべし(中略)ことに老人の剛の者にて身は盲目なれば心の内のりきみ無念の極を謡ひ現すものぞ、平生の老人の如く此体のものにて工夫すべし」とあり、最初のシテの第一声が古くから難しい謡であると考えられています。ぜひ耳を澄ませていただければと思います。

三つ目の見どころは、シテが「屋島の合戦」を語る場面(舞台展開5)です。ここは「景清」のクライマックスでシテの仕方話と

寺の大仏開眼供養の場に景清が潜入して頼朝を狙い、撃退されて逃げ延びるといふあらすじになっていますが、この襲撃は『平家物語』では他の落人の仕業とされています。また、景清がこの時に捕らえられ、頼朝の前にて両目をえぐってどこかに放浪したとも言われています。ちなみに、この大仏開眼供養と平家の落人は因縁深い関係と言えます。なぜなら、平家最大の悪行と言われるのが東大寺の焼き討ちで、この時に焼き払われた大仏を十五年かけて再建した国家的慶事が、この大仏開眼供養の日でした。源氏に対して不屈の闘志を燃やす平家の落人にとっては、平家の罪業の跡を完全に消去する日であり、平家の歴史の終焉を意味する日でもありました。だからこそ、平家の落人の象徴たる景清は『平家物語』ではその日に餓死し、他の伝承では大仏開眼とともに自ら目をえぐって閉眼するのです。

能「景清」では日向国に住む盲目の人として登場しますが、『平家物語』においては常陸国で亡くなったとされています。なぜ盲目となつて日向国に住むことになったのかについては、能と同時代に流行した幸若舞(こうわかまい)や様々な伝承にて語られています。

平家滅亡後、景清は頼朝の命を三十七回も狙うが果たせず、熱田神宮の宮司の娘・小野姫と結婚し、しばらくの間、神宮に匿われています。ちなみに「景清」ツレの人丸は、この小野姫との娘と言われています。景清の行方を捜す頼朝は舅の宮司を捕え、景清をおびき出そうとします。景清は舅を救うために入牢しますが、清水観音の加護によって牢を抜ける事ができます。しかし景清は逃げることはせず、清水寺に参拝した後に再び牢へ。そして処刑の日になり、梶原景季(かげすえ)によって切られますが、清水観音が身代わりとなり処刑を免れます。頼朝は清水観音の奇跡に感動して景清を赦免して家臣として召し抱えようと思いますが、景清はこれを固辞し、報復の念を

なりますので、シテの謡、動き共に見どころ、聴きどころかと思えます。景清は日向国に流されて盲目の琵琶法師となり、平家語りを始めたという伝説が室町時代からあり、現在も景清愛用の琵琶が宮崎県に残されています。おそらく本曲の作者も、景清が琵琶法師になった事を念頭に置いて作曲したものであると思います。その証拠に、「景清」の中で景清は「日向の勾当(こうとう)」と名乗っていますが、これは琵琶法師の役職の一つであり、さらに衣装も僧形でありながら数珠を持つておらず、出家していないのに僧の姿をしているのは琵琶法師の象徴と言われています。そのため景清が屋島の語りをする場面は、景清が自らの勇姿を語る姿と、琵琶法師が平家語りをしている姿が重なり、重層的に演出されているという見方もできると思えます。

今回の演目の「三井寺」も親子の再会が主題の一つですが、親と子という観点から考えると、景清と人丸は非常に似た環境で暮らしていました。人丸は平家武将の娘でありながら敵方の源氏の本拠地の鎌倉に住み、一方で景清も頼朝を暗殺するという野望を果たせず盲目となり、いずれも世間から隔絶した孤独な生活を送っています。そんな二人が鎌倉から最も離れた場所である日向国で再会し、後の世を頼み別れます。この別れは、人丸に対する景清の親心ではないかと思えます。そのまま二人で暮らせば、人丸が乞食の娘であることが知られて迷惑が掛かるので、別れなければならぬ。おそらくこの世では二度と会うことはないが、後の世の供養を頼むことによって親子は精神的に繋がり、人丸に今後の生きる意味、道しるべを与えたとも言えます。そしてそれは景清がかつて捨ててしまった人丸への罪滅ぼしなのではないでしょうか。ぜひ最後の二人の別れの場面をよくよく見て、彼らの想いを感じていただければと存じます。

能 三井寺

■物語の背景にある「観音信仰」

能「三井寺」の後場は、琵琶湖の南西にある「園城寺(おんじょうじ)」が舞台となっています。三井寺とは園城寺の別名で、天智・天武・持統天皇の産湯に境内の湧き水を使ったことから、「御井の寺」と呼ばれるようになり、それが変化して「三井寺」になったと言われています。この井戸は現在でも「閑伽井屋(あかいや)」として残っています。一方、園城寺の名称は弘文天皇(大友皇子)を弔うため、その皇子の大夫与多王(おおともよたのおおきみ)が自分の荘園の園城村を寄進した時に、天武天皇より「園城」の勅額(ちよくがく)を賜ったのが由来と言われています。

ではなぜ、清水寺で霊夢を蒙(こうむ)った母が園城寺にて子供と再会するのでしょうか。このあらゆるすじの根底には、観音信仰があります。「観世音菩薩」は、全ての世の衆生(しゅじょう)が種々の苦難に襲われた時の声(音)を親じて救うことから、その名で呼ばれています。特に現世利益のある菩薩と考えられ、三十三の姿に身を変えて人々を救うと考えられ、中世に阿弥陀信仰(浄土教)と共に広まり、絶大な支持を得ました。この利益を現すように、清水寺の観世音菩薩が「ただ頼め しめじが原の さしも草 我世の中に あらん限りは(ただただ頼りにしなさい。私がこの世にいる限りは頼る者は全て救いましょう)」と詠んだと言われ、この御神詠(ごしんえい)は前シテの霊夢を蒙る謡の中にも引用されています。そして、清水寺の観世音菩薩のお告げを受けた先の三井寺でも同じく観世音菩薩が祀られており、親子が再会した縁は観音菩薩の功德であったと言えます。ちなみに、本曲の舞台が近江国園城寺なのは尋ねる人に「会(お)う」と「近江(おうみ)国」が、曲名が園城寺ではなく三井寺とされている事については子供を「見(み)出す」と「三井(みい)寺」が、それぞれ掛け言葉になっているからと言われています。

■漢詩や経文を引いた謡の美しさと狂女の風情

「三井寺」は詞章が美しいのに加えて、その連なりが美しい曲です。これは「三井寺」が作曲された当時、貴族の間で流行していた連歌をて抗議します。賈島が漢詩の上の二句を「団々として海峡を離れ冉々(ぜんぜん)として雲衢(うんく)を出づ(丸々とした月が海辺近い山から出でて、段々と昇っていく)」と詠み、下の二句を考えて月を眺めていると「今宵一輪満てり。清光何れの処にか無からん(今宵の月は本当に丸々としている。これほど清らかな光が当たらないところなどないだろう)」という詩が思い浮かび、あまりに良い漢詩ができたことを喜んで高樓に登って鐘を撞きました。この逸話を引用し、賈島ほどの詩人(聖人)も月に心が乱れて詩狂と呼ばれることがあるのだから、自分のような狂女が乱れるのは仕方ないことだと言い、鐘を撞きます。当時、鐘の撞く時間は六回あり、晨朝(じんじょう、午前四時)、日中(正午)、入相(午後六時)、初夜(午後八時)、中夜(午前零時)、後夜(午前二時)の事を指します。この内の四つの時に鳴る鐘を法華経の四句の経文に当てはめ、初夜は「諸行無常」、後夜は「是生滅法(ぜしよめつぼう)」、晨朝は「生滅滅已(しょうめつめつい)」、入相は「寂滅為楽(じゃくめついらく)」の音であると謡います。この四句の経文の意味は、「この世のすべては移り変わり、これがこの生滅する世界の理である。生滅にとらわれる自分の心を滅して、寂滅を持って涅槃(ねはん)にいたる」という意味です。そしてこの鐘の響きによって、狂女は五障の雲が晴れて徐々に正気へと戻ります。ちょうどこの部分でシテは作り物の撞木(しゅもく)に付いている紅段(朱色の紐)を引いて鐘を撞きます。そしてこの紅段がはためくと、五障の雲が舞っているように見えますので、この部分はよくよくご覧ください。

■世阿弥の狂女論を深化させた作品

能「三井寺」は物狂い能の一つに分類されますが、世阿弥は『風姿花伝』にて、物狂い能について「いかにも物思ふ気色を本意にあてて、狂う所を花にあてて、心を入れて狂へば、感も、面白き見所も、定めてあるべし。」と記しており、思い故に狂う姿に花があると考えていました。さらに物狂い能の中でも、狂女の能を神様や怨霊の憑き物の能と分けて演じるべしとの意味で、「親に別れ、子を尋ね、夫に捨てられ、妻に後るる、かやうの思ひに狂乱する物狂、一大事なり。よきほどのシテも、ここを心に分けずして、ただ一偏に狂ひはたらくほどに、見る人の感もなし。」と書き残し、狂女の能をとりわけ大切にしました。

取り入れ、言葉の連なりによって流れるように風景描写を行っているためです。特に、舞台展開2のシテが都から三井寺まで移動する行程や三井寺から見る風景の描写は、聞いているだけで風景が想い浮かぶ大変美しい部分です。しかし、舞台展開4以降は漢詩や経文(きょうもん)の言葉を中心に話が進んでいくので、現代に生きる我々にとっては音だけで聞くと難しい言葉が多く、理解しにくいと思われるので、ここで少し補足を加えます。

鐘の音に引かれた狂女は、三井寺の鐘の伝説を引用して鐘に近づきます。その伝説とは、平将門を討伐したことでも有名な平安時代の武将・藤原秀郷(倭藤太)にまつわる話です。琵琶湖の瀬田の唐橋に大蛇が横たわり、人々が渡れずに困っていると、秀郷がやってきて大蛇を踏みつけて橋を渡りました。すると大蛇は人の姿となり、比良山に住む大百足(むかで)によって苦しめられているので助けてほしいと頼みます。これを聞いた秀郷は大百足を退治し、そのお礼に竜宮より様々な宝を賜り、その一つが三井寺に奉納された梵鐘(ぼんしょう)であるという伝説です。そして狂女は、竜宮にまつわる鐘であれば法華経の「龍女成仏(りゅうによじょうぶつ)」に縁があるので、自分も鐘を撞きたいと考えます。この龍女成仏とは女性が成仏するための方法の一つで、当時の仏教の教えでは女性は五障があるため、成仏できないと考えられていました。しかし法華経のこの逸話では、聡明な龍の少女が仏の教えを学んで成仏したことが記されており、この逸話をもとに女性も成仏することが可能であると考えられるようになりました。シテは竜宮に縁のある鐘であれば、龍女にも縁があり、女性の自分もその鐘を撞くことで仏縁を願ったという事になります。しかし、僧に鐘を撞く事を止められると、狂女は「夜、庾公(ゆこう)が樓に登りしも。月に詠ぜし鐘の音なり許さしめ」と反論します。庾公は晋の時代の人で、ある月の夜に部下が南楼に登って月を見ながら詩興していたのをとがめず、自身も樓に登って共に詩興したという故事を引いて、自分も同じ心境で鐘を撞こうとしたのだから許してくれと反論したのです。これに対して僧は、狂人の身でなぜそんな風情のあることを言うのかと問うと、狂女はさらに唐の詩人・賈島(かとう)の漢詩の逸話を引い

「三井寺」は世阿弥の晩年頃に作曲された作者不明の作品ですが、ある意味で世阿弥の説いた狂女の能を深化させようとした作品と言えます。世阿弥作の物狂い能はどれも最も盛り上がる部分に舞いを配置し、その直後に再会や憑き物が落ちる事などによって狂いが覚めて終曲となります。しかし「三井寺」は、盛り上がる狂いの部分の後にシテが下居するクセ(舞台展開5)が来る展開となっており、室町時代末期の伝書では「偽りの狂女、謀りごとの狂気」と言われていました。このような展開になった理由は、主題に狂女以外の要素の「三井寺の鐘」と「月」を加えたためと考えられます。三井寺の鐘は「銘」の神護寺(東大寺とも)、「形」の平等院と並んで、「声」の三井寺と呼ばれて日本三名鐘の一つとされ、近江八景の一つにも選ばれている名所です。鐘は山の中腹にあり水が近くにある方が良くとされ、鐘の音が山から吹き下ろす風に乗って、遮蔽物が無く湿度の高い水(川や湖)に沿って広がっていくと言われています。つまり、三井寺は琵琶湖畔にあり、鐘の音が響くには絶好のロケーションなのです。

この名所の鐘の音と狂女の感情の起伏をリンクさせて作った曲が「三井寺」と言えます。鐘の響きが波状に広がるように、狂女の心の乱れも波のように満ち引きし、寄せては返す波のような感情が徐々に大きくなって鐘之段(舞台展開4)にて大きく乱れ、鐘を撞く事でやがて正気を取り戻していきます。狂女は狂いから覚めて母となり、また千満の顔が月光に照らされて我が子と気づき再会できたと考えられます。このように、世阿弥が狂う所を花とした狂女の能に、「鐘」と「月」という要素を加えて深化させようとした作品と言えるのではないのでしょうか。

折しも「三井寺」と舞囃子「羽衣」には、「三五夜中」という満月を表す白楽天(白居易)の漢詩の一部が引用されています。十五夜の月の下で舞う「狂女」と「天女」。全く異なる月夜の物語となりますので、ぜひその月の色を想像してみてくださいと思います。

また本日の演目の二曲は、「景清」において藤原秀郷の子孫の景清が諸行無常の物語を語り、「三井寺」では狂女が藤原秀郷が竜宮より持ち帰った鐘を撞いて諸行無常の響きを奏するという、「藤原秀郷」と「諸行無常」の二つのキーワードで繋がっています。